

たが、2回目のカーテンコールの時は囁りをひそめていたことも、それを証明している。

その現代的な味付けに最適役なのは、キーンリイサイドであった。線は細いが、若さゆえの怖い物知らずなドン・ジョヴァンニをリアルに演じ、上半身裸になっても色男としての期待を裏切らない歌手は貴重であろう。そこに、前プロダクションではマゼットで絶賛されたシャリンガーがレボレッロに抜擢され、多少役不足気味ではあるが、2人のコンビがなければ、この敏捷な演出はここまで生きてこなかっただろうと思われる。2人とも、声がかすれる部分が目立ったのは、やはり頑張り過ぎか。

女性陣は予想外な結果で、マルティーナ・ヤンコヴァのツェルリーナの歌唱が、身分の低さ、若さゆえの率直さ、ストレートな色気等を表現し、適役だった。ドンナ・エルヴィーラが初役となるマリリン・ハルテリウスは、効果的にアクセントをつけることによってドラマティックに聴かせていたが、やはりこの役にはまだ声が弱い。一番適役と思われたエヴァ・メイのドンナ・アンナは、正確な技術を駆使しても声の使い方があまりにも細いので、ドンナ・アンナの女らしさが感じられず、ドラマとしての盛り上がりには欠けた。

マゼット役をそつなくこなしていたラインハルト・マイル、最近イタリア的になり過ぎて、「モーツァルト・テノール」としては疑問を残すピョートル・ベクチャラ以外は全員、小粒の配役だったが、演劇的要素の質が高く十分楽しめた。(中 東生)

チューリヒ歌劇場《ドン・ジョヴァンニ》プレミア

前日にバチカンのサン・ピエトロ寺院で、スイス衛兵のローマ法王護衛500周年記念に招かれたウェルザー=メスト率いるチューリヒ歌劇場管弦楽団だが、疲れも見せず、むしろオケと指揮者の絆がいつもよりも強くなったかのような印象を受けた序曲であった。

チューリヒ歌劇場には過去に、名高いボネル演出の《ドン・ジョヴァンニ》があるので、聴衆はつい保守的になるが、新しい時代を築くという意味では、存在価値の高い舞台に仕上がっていた。演出陣に恒例のブーイングが今夜も元気に飛び出し